



曳舟幼稚園だより — 5月号 —

令和4年4月28日
墨田区立曳舟幼稚園
園長 吉岡 大司

一人一人が輝く幼稚園

副園長 小嶋 直美

園庭のツツジが赤白の花を咲かせ、園門をくぐる子供たちを出迎えています。紅白の花々が進級した年長組の日々の頑張りを喜んでいるかのようです。令和4年度も、新型コロナウイルス感染症対策を講じてのスタートとなりました。残念ながら、いまだに収束の兆しは見えていません。しかし、子供たちは笑顔で登園し、園生活を意欲的に進めています。

少人数となった曳舟幼稚園ですが、子供たちは広い園舎や園庭、校庭をのびのびと使い、生き生きと遊んでいます。少人数であることや、ひと学年であることを感じさせないほど一人一人が個性を發揮し、その姿を子供同士も教職員同士も見取ることができる環境になっています。一人一人の子供たちの存在感が大きく表れているのには、その背景にある保護者の方の強い結束が大きく影響していると考えます。

先日、本園の行事である「親子で遊ぼう会」を実施しました。徒歩30分程の道のりを公園まで歩き、アスレチックや集団ゲーム等を行いました。往復の道では、保護者が互いに交通ルールを教え、歩く速度が落ちる子がいれば、声を掛け、待ち、全員が歩ききることができるように思いやり励ます姿が何度もありました。アスレチックでは、ロープの左右やはしごの上下に分かれて「どうぞー」「見てるね」と子供たちの姿を見守り、声を掛け合うことを保護者同士が自然に行っていました。集団ゲームの際には、子供たちと一緒に心から活動を楽しむ保護者の姿がたくさんありました。ごく普通のことであり、当たり前のことであるかもしれません。しかし、こうして大人たちがつながっている姿を子供たちが見ることに大きな意味があります。保護者の会の活動も然りです。大人たちが協力し、知恵を出し合い、工夫しています。もしかすると、コロナ禍のために、できないものをできないとあきらめるのではなく、できないなら、できるものに形を変えてやっというこれまでに培った姿勢が生きているののかもしれません。このように保護者の主体性や協調性をもって取り組む姿を日常的に目の当たりにし、見守られ支えられている子供たちは、大人の姿勢から多くのことを学んでいるのだと思います。

曳舟幼稚園に着任しての一か月を経て、保護者の方の「曳舟幼稚園に対する愛・思い」を強く感じます。私たち教職員一同も、協力し合い、チームワークとフットワークのよさを生かし、この一年間、最善を尽くしていきたいと思ひます。

